


## 現在はヘム縫いの担い手不足

タオルのヘム縫いは、かつて多くの家内労働者  が従事しており、とくに農業の傍ら女性が副業として携わり、タオル工業の発展を長らく支えてきた。しかし、1990年代以降タオル不況に直面したこと、女性の働き方が変わったこと、農家の減少で動力ミシンを置く納屋が減少したことなどの複合要因によって、タオルのヘム縫いを担う家内労働者が減少している。対応を迫られたタオルメーカーは、外注に頼っていたヘム縫いを自社のタオル工場で賄うようになった。もちろん、家内労働者がいなくなったわけではないが、タオル需要に対してヘム縫いの担い手が不足、加工が間に合っていないのが現状である。

厚生労働省の「令和2年度家内労働等実態調査の概況」によると、家内労働者の年齢は「70歳以上」が29.3%でもっとも多くを占めており、平均年齢は58.9歳となっているが、年々高齢化傾向にある。性別では、「男性」10.5%、「女性」89.5%となっており、圧倒的に女性が多い。

表1で2003年から2020年における家内労働者の年齢別推移をみると、70歳以上の家内労働者が増加しているのに対し、2003年時点では上位を占めていた60～70歳未満と50～60歳未満が減少し、とりわけ50～60歳未満の下げ幅が大きい。この表は全産業を対象にしているため、タオルを含む繊維工業につい



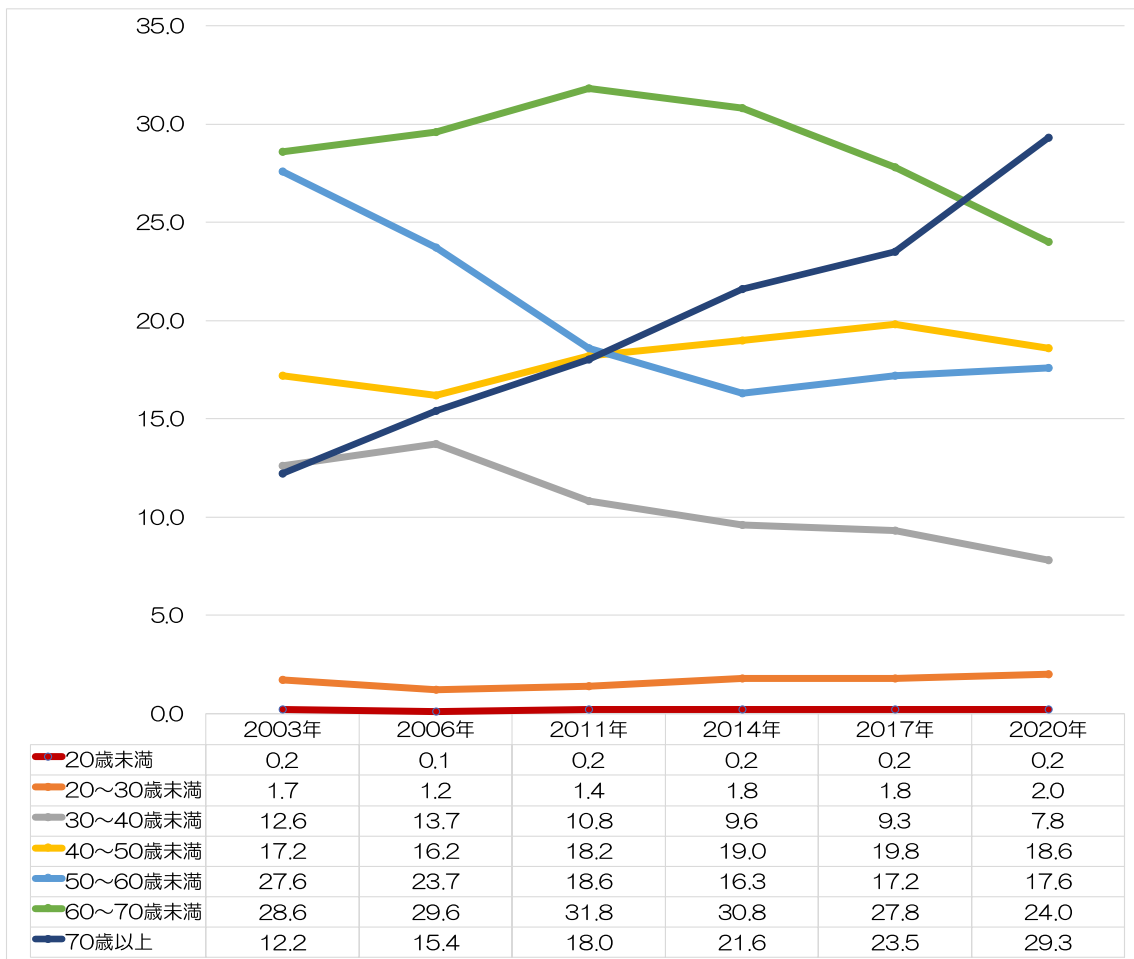
フェイスタオルやタオルマフラーなど  
さまざまな種類のタオルに仕上げとして縫製

（ヘム縫い）加工する

（今井タオル本社ショールームにて撮影）

での詳細はわからないが、家内労働者が高齢化していることは間違いのないだろう。

表 1 2003年から2020年における家内労働者の年齢別推移  
(%)



注：2011年から2020年については「不明」の項目があり、それぞれ以下のようにになっている。2011年(1.1%)、2014年(0.8%)、2017年(0.5%)、2020年(0.4%)。

出典：厚生労働省「家内労働等実態調査」(2003年、2006年、2011年、2014年、2017年、2020年)より作成。

藤原直美氏のように、タオルメーカーで縫製を専門におこなう技術者を厚生労働省の「職種解説」では「ミシン縫製工」と定義しており、「動力ミシンや特殊ミシンによる縫製の作業に従事する者」に限定している。

藤原氏が今井タオルに入社した2012年は、JAPANブランド育成支援事業（中小企業庁）の効果によって今治タオルの生産が若干盛り返したときであり、今治タオル工業組合が認証する商品認定マーク「imabari towel Japan」がすでにタオルに付けられていた（JAPANブランド育成支援事業については「タオルびと」2013年4月号～7月号を参照）。そのため、製品化されたタオルのすべてではな

いが、自社ブランドの場合でも OEM の場合でも、ヘム縫いの際にロゴマークを縫い合わせる手間がくわわった。ロゴマークのサイズが小さいため、素人目にはかなり困難な作業に見えるが、「難しいですが、慣れですよ」と藤原氏は言う。ヘム縫いで失敗することは99%ないことを考えると、やはり縫製技術の高さが要求される。

最近では、コロナ禍がタオル業界にも影響を与えており、生産量が減少した。ようやくコロナ禍が落ち着いてきてはいるものの、藤原氏が今井タオルに入社して以来、初めて経験する「余裕のある仕事量」である。「コロナ時はヘム縫いの仕事が若干減りましたね。ヘム縫いに携わって12年間ですが、タオル業界にとってはいまが一番たいへんなときですね。」

タオル需要は、他の消費財とおなじように社会経済状況の変化に敏感に反応するが、どのような状況下でもタオルはわれわれにとって日用品として不可欠な財に変わりはない。



出典：今治タオル工業組合 HP

#### 4. お気に入りの本、詩、そして歌

### 人生指南の本と、人生の機微を描く本

藤原氏のお気に入りの本から紹介しよう。1冊目は『痛快!寂聴 仏教塾』（瀬戸内寂聴、集英社、2000年）である。藤原氏が辛いとき、しんどいときにページを開いて元気をもらう本である。とくに好きな言葉は「笑顔のプレゼント」（同書、26-27頁）である。このページは何度も繰り返し読んでいます。要約すると、以下のような内容である。



左：瀬戸内寂聴『痛快!寂聴 仏教塾』集英社インターナショナル、2000年。

（今治市立中央図書館所蔵）

右：おーなり由子『365日のスプーン』大和書房、2016年。

仏教の教えでは、「あの世」に行くまえに6つの修行があり、それが布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧である。このなかの布施

にはプレゼントという意味があって、他者に笑顔をプレゼントすることを「和顔施<sup>わがんせ</sup>」と言う。和顔施は立派な布施であり、苦しんでいる人や悲しんでいる人に笑顔をプレゼントすることで、みずからも行を積んでいるのである。

2冊目は、『365日のスプーン』（おーなり由子、大和書房、2016年）である。この本は、藤原氏がよく聴いている地元ラジオ局「ラヂオバリバリ今治」の番組のなかで紹介されていた。藤原氏は、その内容に興味をもったので読んでみることにした。すると、365日、毎日の日常が詩的に描かれており、作者のおーなり由子氏の感性が溢れ出していた。本の帯に「今日いちにち スプーン一杯のまほうをかけよう。」とあるように、一日一日の小さな幸せが人生の機微とともに描かれている。

## 「心に太陽を持って」

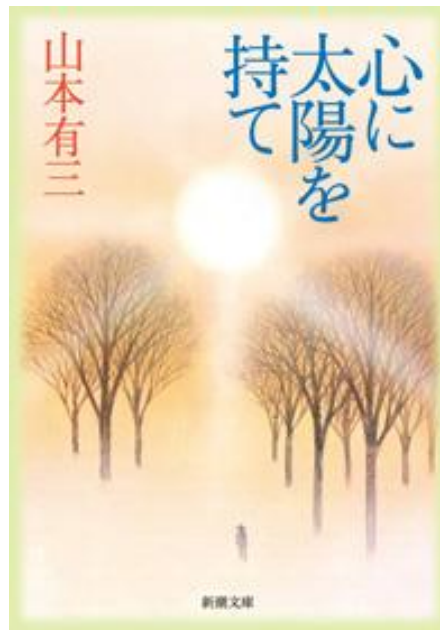
つぎに、藤原氏が好きな詩である。ドイツの詩人・ツェーザル・フライシュレンの「心に太陽を持って」だ。日本語訳は山本有三によるものが有名である（山本有三編著『心に太陽を持って』新潮社、1985年）。フラと音楽が好きな藤原氏のために創られた、エールの詩である。心に元気や勇気を与えてくれるこの詩の全文に、ぜひとも触れてほしい。

ツェーザル・フライシュレン Cäsar Fleischlen は、1864年にドイツのシュトゥットガルトに生まれた詩人である。フランシュレンは、「心に太陽を持って Hab' Sonne im Herzen」の作者として日本では著名である。世界でも英語をはじめ、フランス語、スペイン語、ハンガリー語、イタリア語、オランダ語など多くの言語に訳されている。

山本有三は、1887年に栃木県下都賀郡栃木町（現・栃木市）に生まれ、東京帝国大学独文科を卒業後、劇作家として徐々に表舞台に出てきた。その後、大正期に『女の一生』や『真実一路』、『路傍

の石』など有名な作品を手がけた。「心に太陽を持つて」は、ドイツ文学者の高橋健二が山本有三に紹介し、『日本小国民文庫』（全16巻、1935～1937年、新潮社）に収録されたのが最初であるが、山本有三の要望により1981年に新潮文庫として刊行された。

高橋健二も山本有三とおなじ東京帝国大学独文科を卒業しており、1931年からドイツへ1年半ほど留学していた際にフライシュレンの「Hab' Sonne im Herzen」を知り、帰国後に日本放送協会（NHK）のラジオドイツ語講座でとり上げている。



山本有三編著『心に太陽を持つて』新潮社（新潮文庫）、2003年

（今治市立図書館所蔵）

## 「フラ」と「中島みゆき」は相性がいい

そして、最後は歌を紹介しよう。フラ・アウアナに使われる音楽は、ハワイ生まれの音楽だけでなく日本のポップ・ミュージックやニュー・ミュージックなどもアレンジされ、踊りのバック・ミュージック

ジックによく使用される。藤原氏は、フラの定番曲も好きだが、中島みゆきの「糸」はお気に入りの曲である。フラと中島みゆきは意外と相性がいい。

（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）



### 参考文献

阿部克行「戦後復興の麒麟児 今井茂樹」今治繊維リソースセンター『テキスタイル・レポート』Vol.8、四国タオル工業組合、2006年2月、1-2頁。

荻原智美「現代日本におけるハワイの伝統舞踊フラの位置付け：予備的考察」国立音楽大学大学院『音楽研究：大学院研究年報』第30号、2021年3月、217-232頁。

尾崎一水編『愛媛県商工総覧』増田兄弟活版所、1950年。

越智進『タオルと共に生きた五十年』旬日の出印刷、1990年。

鳥丸聡「連載：変革期に挑む九州の底地から（第15回）九州の多様な集客戦略」アジア成長研究所『東アジアへの視点』第24巻3号、2013年、59-67頁。

日本バス協会編『2020年度版（令和2年度）日本のバス事業』第59巻、日本バス協会、2020年。

### 編集後記

「タオルびと」に登場する方々をどのように探しているのかという質問をたまに受けます。「タオルびと」制作プロジェクトのメンバーをはじめ、今治タオル工業組合や愛媛県繊維染色工業組合、今治地場産業振興センター、

今治商工会議所など、地元の多くの方々に推薦していただき、依頼をかけています。地元のネットワークがあってこそ、「タオルびと」は成り立っています。今回ご登場いただいた藤原直美さんも、こうしたネットワークから生まれた出会いです。

わたしにとって藤原さんのイメージカラーはピンクです。最初にお会いしたときもインタビューのときも、その印象は変わりませんでした。若い頃からファッションに敏感で、踊りや歌など楽しいことが大好きな感性豊かな藤原さん。それもあってか、藤原さんはユニークな感度の持ち主であり、また人間観察力が鋭いです。多くの人がスルーしてしまうところで感心したり、記憶に留めたり、実行してみたり・・・。



スイーツ好きの藤原さんがインタビュー当日、わざわざもってきてくれた「ラムリン」(写真)ですが、これを選ぶ感性はやはり格別です。なんともキュートなネーミングのラムリンは、カステラにラム酒を染み込ませた大人スイーツです。今治で50年近く菓子を製造・販売していた「くろふね菓舗」がつくっていましたが、2021年6月に閉店してしまいました。ところが、2022年4月に菓子卸業の(株)アリスト木曾が復活させました。ラムリンをほおばると、自然と笑顔になります。

ラムリン食べて「和顔施」なり。

## 次回の「タオルびと」

「タオルびと」の40人目は、今治繊維リソースセンター「タオル縫製士養成所」の初代指導者として活躍中の村上雪美氏である。幼少時代からタオルと縁の深い村上氏は、どのような経緯で縫製技術者の育成に携わるようになったのか、またどのような思いでタオルと向き合ってきたのかについて話をうかがう。